

第3講 ユーラシア地域世界の交流

〈解法のテクニック〉

*問題

2世紀のユーラシア大陸の東西には、ローマ帝国と漢帝国（後漢）という二つの巨大な帝国が並んでいた。ローマ帝国では、アウグストゥスにより事実上の帝政が開始されて以来2世紀の間、「ローマの平和」と呼ばれる繁栄の時代が続き、漢帝国は、1世紀はじめの一時期外戚の王莽によって滅ぼされたが、まもなく劉秀（光武帝）によって再建され、倭からの使者に「漢委奴国王印」を与えるなど、東方にも勢力をのばした。後漢はまた匈奴を攻めて西域経営にも力を注ぎ、西域都護班超は、成功はしなかったが、部下の甘英をローマ帝国に派遣した。また、2世紀中ごろ、大秦王安敦の使者を名乗る人物が、海路中国を訪問した。このように、2世紀頃にはユーラシア大陸の東西の帝国が、直接・間接的に交渉をもつようになっていたのである。そして、両帝国の間であって、中継貿易によって多くの国々が繁栄するようになった。

以上の点を考慮しつつ、これら二つの東西帝国の間であって、中継貿易で繁栄した国々について、相互の関係にも留意しつつ、以下の指定語を用いて450字以内で論述せよ。ただし、指定語を用いた場合には下線を付すこと。

港市国家　クシャーナ朝　季節風貿易　扶南　シルクロード　紅海

*範囲とテーマを確認する

範囲：2世紀、後漢とローマ帝国の間の国々

テーマ：中継貿易を行った諸国とその相互関係

*構成メモを工夫し、書くべき内容を整理する

◎シルクロードの交易路の諸国

中継貿易 漢の絹、漢→中央アジア→西アジア→ローマ

地域 中央アジア東部＝漢支配下のオアシス都市

中央アジア西部＝クシャーナ朝（インド北西部も支配）

西アジア＝パルティア

相互の関係 パルティアとローマ帝国の抗争→ローマの商人は新たな商業ルート求める

◎海の道の交易路の諸国

中継貿易 絹、香辛料や象牙、季節風貿易で紅海→アラビア半島→インド→東南アジア

地域 インド＝サータヴァーハナ朝、南端の諸王朝

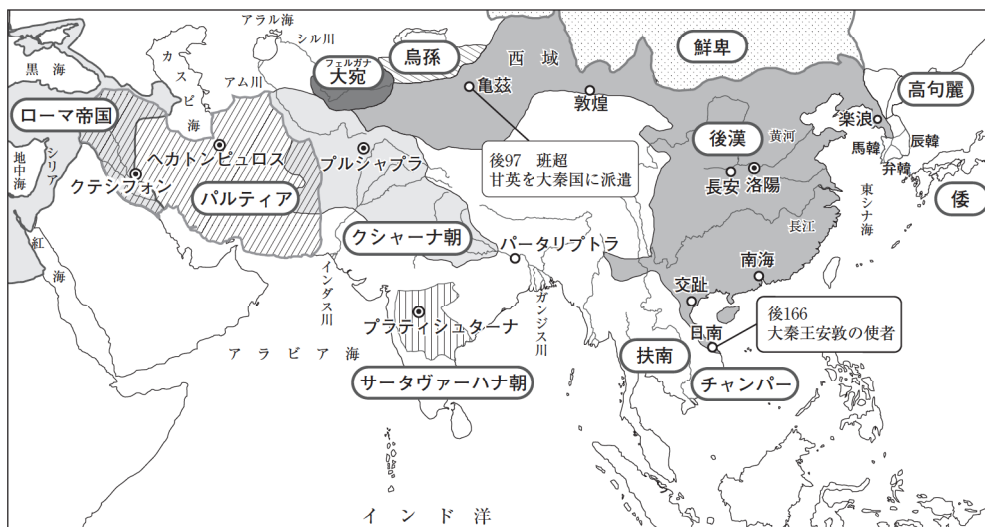
東南アジア＝扶南

相互の関係 インド商人が東南アジア沿岸へ→扶南などの港市国家成立

漢の冊封体制→扶南は漢とも朝貢貿易

*解答例

漢帝国の絹は、支配下の中央アジア東部のオアシス都市を経て、中央アジア西部とインド北西部を支配したクシャーナ朝、西アジアを支配したパルティアを経由するシルクロード貿易でローマ帝国に運ばれた。しかし、パルティアとローマ帝国はしばしば抗争関係に陥ったため、ローマ帝国の商人はパルティアを介さない交易路を求め、エジプトから紅海を経てアラビア半島にいたり、そこから季節風を利用してインドと交易する季節風貿易を開始した。そのためクシャーナ朝は海の道を経てもローマ帝国と交易を行ったが、デカン高原のサータヴァーハナ朝や半島南端の諸王朝も、ローマ帝国に香辛料や象牙を輸出して繁栄した。これらインド諸国の商人は東南アジアへも進出し、インドシナ半島の沿岸にインド文化の影響が及んでメコン下流域の扶南などの港市国家が成立した。漢帝国は周辺諸国に対し、君臣関係を結ぶ冊封体制の国際秩序を形成したが、扶南はこれを利用して漢帝国との朝貢貿易も行った。そのため漢帝国とローマ帝国の間は、海の道によっても結ばれることとなった。



2世紀の世界

第3講

① ユーラシアの内陸世界

問1 内陸アジアの主な東西交易路を二つ挙げ、その特徴をそれぞれ50字以内で説明せよ。

問2 紀元前1000年紀の遊牧騎馬民族の登場から近代ヨーロッパ勢力による世界制覇の時代まで、ユーラシア世界史は購買力豊かな南の農耕民族と武力に優れる北の遊牧騎馬民族との対立・協調関係の中で推移してきた。実際には協調の時代も長いのであるが、どうしても目立つのは対立の歴史である。ところで、その対立の象徴とも言うべき巨大な建造物がユーラシア東部に残っている。その歴史について知るところを述べるとともに、それが無用の長物であった時代とその理由についても言及せよ。(200字)

《解法とヒント》

長城以南を支配した王朝を考えてみよう